

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

子育て中の壁紙張り替え

「そろそろ壁紙の張り替えもしたいところなんですけど……」と、ぼつりとつぶやく若いお母さんがいた。

躊躇している様子に、働きながらの改装は大変だというニュアンスが伝わってきた。確かに部屋の片づけを考えると気が滅入るし、ピアノや家具はどうするのだろうかと思っているうちに日々が過ぎていくものだ。

まずはどんな状態なのかを見に伺ってみた。小学一年生ともっと小さいお子さんがいるお宅のリビングは、おもちゃはもちろん、文房具に保育園道具等々、着替え用の子供の洋服箆笥もリビングに置いてある。

お風呂上がりに、二階にあるクロークに取りに行くだけでも大変だと思ってしまう。単純な壁紙の張り替えと思っても、リフォームの間はどこに物を移し、その期間どう過ごすかは考えどころだ。

だがそれ以前に伺ってみて、なぜ張り替えたかったのかがよくわかった。腕白な小さい子供二人をのびのびと育てているうちに、壁には色鉛筆で長くわからない模様が描かれ、はてはボ

ールペンまで登場している。その上に粘土遊びの後の手あかが塗りこめられて、快適なリビングと呼ぶにはもはや限界と思われた。自由奔放な無邪気さはこの時期だけと、両親の度量の大きさを微笑ましくも思える。

だが子育て経験者の方の中には、うちの子はそんなことはなかったとか、あるいはさせなかったと言つ方もいるとは思つし、かく言つ私も一瞬そのことが脳裏を走ったのだが、子供の成長期には何が正解かは分からない。

問題は、もう今後このお子さんは壁に落書きをしないのか？ といつことだ。

せっかく張り替えたにも関わらず、また同じ状態となったのでは、元の黙阿弥だ。「最近はどうしなくなつたよね」というお父さんの言葉の横で、首を傾げ自信なさそうにしているお母さんがいた。

「落書きOKな壁紙」というものも世の中にはある。「書いては消せる壁紙」というキャッチフレーズの物もあるにはあるのだが、あと何年壁の落書きが問題に

なるのだろうか。大きくなつてまで壁に落書きをする人はいない。少なくとも今後一〇年以上は過ごす部屋を、落書きをキーワードにすることで色も柄も限定され、インテリアの楽しみを奪つことになるのはいかなものかと思つてしまふ。

確かに一般社団法人住宅リフォーム推進協議会の住宅リフォーム実例調査の報告書によると、リフォーム工事内容のトップは「内装の変更」が挙げられる。壁紙や床の張り替えリフォームなどは、毎日みんなが見て過ごす空間が大きくリセットされるためだろう。

「やるなら今！」と言いそうになって、フツと冷蔵庫の扉にペタペタ貼られているシールが目についた。はがれそうもないキャラクターシールを眺めながら、やはりあと半年ぐらいは……いや少なくとも一年ほど先に延ばした方がいかなと思つてしまった。

素敵で快適な空間づくりを、と言葉で言つのは簡単だがどうやら今は子供の成長に目を細め、壁紙に片眼をつぶり日々を楽しむ時ののだろうかと思つた。



西田恭子のプロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。